

大腸がん検診（職域）

動 向

近年急増する大腸がんを背景に、市民の大腸がんに対する関心は高まっている。同時に検診の必要性も理解され、受診者数は毎年着実に増加している。平成13年度の職域における受診者数は、昨年度より544名増加し、53,561名となった。

当協会の大腸がん検診は、一次スクリーニングに免疫学的便潜血反応検査2回法と自覚症状を主とする問診を実施し、精密検査として内視鏡検査と大腸X線撮影の同日実施による診断精度の高い効果的なシステムを実施している。

大腸精密検査の結果は表4に示すとおり、精密検査受診率は37.6%と極めて低く、これは前日からの下剤の飲用や検査に苦痛を伴うことが未受診の理由と考えられる。その精検結果をみると大腸がん25名と大腸ポリープ351名が発見され、極めて高い精度と病変発見率を示している。

各事業所の健康管理担当者は、精密検査対象者に対して、苦痛を伴う検査ではあるが、精度や有効性を十分に理解してもらい、必ず受診していただくよう指導をお願いしたい。

方 法

大腸がん検診のスクリーニングは免疫学的便潜血反応検査による便の検査を二日連続して提出することと、問診票からのチェックで精密検査の対象者を選別している。要精密検査の対象者は便潜血反応検査と問診を合わせて6.8%であった。

精密検査は全大腸内視鏡検査と注腸X線検査の同日併用法を採用している。併用法の特徴としては1回の全処置で2つの検査ができることと、もう一つは大腸内視鏡と注腸X線検査のそれぞれの欠点を互いに補完することによって、診断上の盲点を少なくできることが挙げられる。

結 果

平成13年度の職域大腸がん検診の実施数は表1に示す通り53,561名で、男女別に見ると男35,402名、女18,159名である。男女比は地域と職域では逆転する。また職域における大腸がん検診の実施人数は年々増加傾向にある。精密検査の実施状況を見ると、当施設で精密検査を実施するAグループでは、対象者32,236名の内要精密検査者は2,141名、6.6%であった。その内訳を見ると便潜血陽性者が1,789名、5.5%、問診からは352名、

1.1%となっている。ここから発見された疾患は、大腸がん25名、大腸ポリープ351名、結腸憩室症240名、内痔核192名であった。便潜血反応陽性と発見疾患との関連を見ると、(+) (+) の二日間陽性者からの発見大腸がんは9名、9.9%と高率であり、1回だけ陽性となった人でも1.9%が大腸がんであった。このことから大腸がん検診で1回でも陽性になったら必ず精密検査を受けるべきであることが分かる。また平成13年度は問診から1名の大腸がんが発見されている。

Aグループの精検受診者総数は806名、37.6%でかなり低いものとなっている。ここで見つかった大腸がんは25名で、母数に対しては0.08%であるが、精検受診者数に対しては3.1%とかなり高く、ここでも未受診者への精密検査受診勧奨の重要性が明らかである。

年齢階層別に見ると表4の通りで、精検受診率は年齢によって多少ばらつきがあるものの、平均37.6%で全体に低率である。便潜血陽性者の受診状況も表4-2に示す通りで、精密検査受診率は40.4%と低く、便潜血反応や精密検査の意義についての説明不足から精密検査への理解が得られていないのではないかと考えられる。今後大腸がん検診の重要性を理解してもらうために、便潜血陽性者に対して精密検査についての十分な説明を行い、精密検査受診率を高めていく必要がある。

中央診療所における検診発見大腸疾患の動向

過去8年間（平成6年から平成13年まで）の大腸がん検診の成績を表6～10に示す。

職域の検診総受診数はのべ394,827名（男265,490名、女129,337名）、要精検率は8.2%であった。

当施設で二次精密検査を受託した職域団体Aグループの精密検査受診率は42.4%に留まったが、大腸ポリープ3,584例と大腸がん190例が発見されている。精密検査受診数に対する疾患発見率は大腸ポリープ47.3%、大腸がん2.5%であった。

これらのうち詳細な結果を追跡調査した大腸ポリープは2,902例でこのうちCIA（腺腫内がん）は227例であった。このCIAを含めた大腸がんは335例で、進行度をみると早期がん259例（77.3%）進行がん76例（22.7%）で、CIAは早期がんの87.6%に相当していた。CIAの92.1%は内視鏡切除のみで治療できた。それ以外の大腸がんは全例開腹手術で治療された。

関係の集計表は99～102頁に掲載